

【熊本的心推進協議会賞】

熊本の心「熊本スピリッツ」を通して考えたこと

菊陽町立菊陽中学校 2年 船附 日菜

私は、7月の道徳の授業で、熊本的心「異国の地で生涯をささぐ」を学習しました。担任の宇土先生の授業は、毎回、話し合いを通して友だちの考えや思いを聞くことができるのでとても楽しみです。授業後、何気なく「熊本的心」をながめていると、最初の教材である「熊本スピリッツ」が目にとまりました。休み時間に、一気に読み終わると気になることがありました。それは、熊本に生まれ、熊本に育つ私には、何となく「熊本的心」や「熊本スピリッツ」をイメージできても、他県の人にはどのように映っているのだろうか、ということでした。

私の両親は鹿児島出身です。今年はお盆に帰省することが決まっていたので、祖父母に聞いてみることにしました。まず、祖父は鹿児島の「郷中教育」について話をしてくれました。郷中教育とは、近所の子ども同士で学び合う「教師のいない教育」であること、そして今も息づく3つの教えとして「負けるな、嘘をつくな、弱いものをいじめるな」などがあることを教えてくれました。その中で一番心に残っていることは、「泣こか 飛ぼかい 泣こよかひつ飛べ」という、迷ったら飛んでしまえ、という勇気を称えたことわざでした。両親は、私に「まず、やってみたら。」とよく言います。両親の言葉が、これらの教えに裏付けられていることが分かりおもしろかったです。

一方、私は「熊本スピリッツ (精神)」について、ラフカディオ・ハーンが語った「簡易・善良・素朴」、そして「日常生活での無用のぜい沢と浪費を憎む精神」について話しました。隣接する両県ですが、伝統的な教えや考え方に違いがあることが分かり、みんな驚いていました。ただ、こよなく日本を愛したハーンは、「熊本」に止まることなく、日本人の気質を「礼儀正しく、俠気があり、献身的で信義の徳をもつ」としたことを紹介すると、「本当、熊本も鹿児島も同じね。」と、祖母がポツリと言いました。

今回、祖父母や両親と「熊本的心」や郷土について話すなかで分かったことがいくつかあります。それは、それぞれの地域には、長い歴史を通して培い、伝えられてきた文化や学問、考え方や教えがあるということです。そして、郷土のために尽くした先人や先達のおかげで今の暮らしがあるということです。ハーンは、日本人、熊本スピリッツを言葉や文字で残しました。祖父母は、自分たちの言葉で「鹿児島の心」を分かり易く教えてくれました。熊本と鹿児島、私の「郷土」に対する誇りや愛着はいっそう高まり、もっと郷土の文化や伝統に触れてみたいという気持ちになりました。

以前、母は「熊本の人には優しく、とても親切。自然豊かで、食べ物もおいしいし、熊本に住んで本当に良かった。熊本の人には気づいているのかなあ。」と言っていました。私は、「おかあさんも立派な熊本の人よ。」と言って大笑いしたことを思い出しました。

私の故郷は熊本です。しかし、鹿児島も私にとっては大切な場所です。今回、この作文を書くに当たり、改めて、祖父母や両親に熊本の良さを教えてもらったような気がします。私には、次の世代に「熊本と鹿児島の『心』」を伝える責任があると思っています。